

健康科学と研究

—健康人間学研究会100回に憶う—

山 根 寛

Helth Scince and Study

—Recollection to One Hundred Times of Health Anthropology Society—

Hiroshi YAMANE

Abstract: The educational study group of College of Medical Technology, Kyoto University started up “Health Anthropology Society” to research health and the various problems concerning health in 1987. It was groping to the problem of newly born, because a modern medicine advanced even to the area where the intellect was exceeded like organ transplant, reproduction, and gene therapy, etc.. Establishment of health science, equipping of the foundation of “Faculty of Healthy Science” and the graduate school was planned. The society was regularly held, and research magazine “Health Anthropology” was started. The health science is a new field where man’s health is treated, and the problem of the quantity and quality of life is researched for various phenomena seen in life. And, College of Medical Technology became School of Health Sciences, Faculty of Medicine in 16 years. The society was held 100 times, and 15 research magazine volumes were issued in 16 years. The object of research in the health science is a subjectivity of the object, intuition of the life, and man’s health. “Health Anthropology” started running aiming at “the Agora of Health Science” now.

Key words: Health science, Health anthropology, Health

胎動：新しい学問として

1987年秋、医学・医療に欠落しているものに真正面から取り組み、科学としての医学が人間の幸福、生命の充実に資することができる手がかりを模索しようという試みとして、京都大学医療技術短期大学部学内研究プロジェクトが結成された。健康が環境や平和といった人類全体に関わる問題と同等なテーマとなり、健康科学ということが語られるようになった時代を反映してのこともあるのだろう。当時の教育研究条

件整備委員会は、その中軸として健康とその諸問題との人間学的研究を行う「健康人間学」を立ち上げた。それは、感染症の克服に始まり、近代医学の進歩が、臓器移植、再生、遺伝子治療など人智を越えた領域にまで広がったことにより、新たに生まれた問への答えの模索であった。贈られた命とは何か、命が長らえればいいのか、人間にとっての幸福とは何か、近代医学がその効率のために置き去りにした、「命の、生活の、一人ひとりの人生の質と時間」という問題に取り組むことこそが、co-medical staff

という和製英語でよばれ、あいまいにひとまとめにされた医療従事者の教育・研究機関の本質と見たのではないだろうか。それは、京都大学医療技術短期大学部を、4年制の健康科学部に発展させようという大きな夢と期待の基に始まった新しい学問の胎動である。

誕生：健康科学の申し子のように

その研究プロジェクトは、哲学の石井誠士助教授（現兵庫県立看護大学教授）をコーディネーターとし、当時毎月研究会を開き、翌年には短期大学部紀要の別冊として「健康人間学」を創刊した。その創刊号に、教育研究条件整備委員会委員長であった濱 弘道理学療法学科教授は、「医学・医療の混迷のこのときに、わが学内において専門を異にするいろいろの人達が集まって、一つの目標の下に新しい学問、『健康人間学』を創められた。“天の時、地の利、人の和”という『健康人間学』の発展を祈ってやまないものである」¹⁾と健康人間学への期待の言葉を寄せている。また、短期大学部主事であった斎明寺 央看護学科教授は、かのソクラテスが哲学の確立において市民と対話したいという公共広場アゴラ (agora) をイメージし、「本短期大学部には、哲学、文学、教育学、心理学などをはじめ、保健体育、基礎科学、看護学、助産学、理学療法、作業療法、基礎医学、臨床検査学、臨床医学の各分野を専攻する生徒が集まっている。これらの人達が、健康科学の確立をめざして、健康と人間について、この『健康人間学のアゴラ』で、対話を通じて思考を深めてゆかれることを希望する」²⁾と述べている。こうして「健康人間学」は、健康科学の申し子のように誕生した。

つかまり立ち：小さくとも 健康科学のアゴラとして

自然科学、人文科学、社会科学のすべてを総合し、健康を、学際的に研究進化させ、「健康科学」として確立する「健康科学部」創設、さらには大学院の完備が構想されていた。そうし

た先達の熱い思いは、時の流れに翻弄され、学部構想の道は閉ざされ、人が入れ替わる間に形骸化したかに見えた。しかし、その思いは、初代コーディネーター石井誠士一般教育助教授から、小西 昭看護学科教授、松本雅彦作業療法学科教授、菅佐和子一般教育教授、田原明夫作業療法学科教授へと引き継がれながら、一般教育、作業療法学科、看護学科の有志教員を中心に、研究会は途切れることなく開催された。短大に新しい教官を迎えるたびに、その教官の教育・研究の果実を紹介して頂く歓迎学習の場を設け、任を終え、また更に新たな地へ移られる教官には歓送の宴を開き、その成果は紀要別冊「健康人間学」として、毎年発行された。短大紀要へのつかまり立ちから始まり独歩へ、「健康人間学」は健康科学のアゴラとして、狭くとも門戸を閉じることはなかった。その小さなアゴラから発せられる年に一度の小誌に、従来の自然科学的学術誌にはない人間の息吹を感じると、いろいろな声が寄せられた。

ひとり歩き：ニュートンを超えて

年始め、ニュートン（1643～1727）のリンゴの木が挿し木や接ぎ木で国内に増え続けているという記事を新聞で読んだ。親木は、40年ほど前に英国の国立物理研究所より東京大学附属植物園に贈られたものという。ニュートンが万有引力の法則を発見するきっかけとなったリンゴ（品種名：ケントの花）の5代目といわれている。その事実の如何は別にして、リンゴにも月にも地球に向かって落ちる力が働いているが、リンゴは地上に落ち、月は運動の慣性の働きで落ちずに地球の周りを回っているという万有引力の法則が発見された。その発見により、近代科学が始まり、以後近代科学は、自然の数学化をもたらすことで成立したといわれる数学的自然科学として、客観性・普遍性を求めることで大いなる発展をとげた。

しかし、様々な現象の謎を解き明かしてきた近代科学も万能ではない。客観的に同じもの＝普遍的と見られていることも、厳密にはその多

くは類似の範疇のことであり、その類似の範疇をどこまで同じとするかを問われれば、客観性も普遍性もあいまいなものである。健康科学は、人間の健康という全一的なものを扱い、生活の中に見られる多様な現象を対象に、命の質、生活の質、人生の質の違いの問題を語る新たな科学分野である。「これは大丈夫だが、この感じは少し困る」というような、主観としては明らかにその Qualia の違いを捉えていながら、客観的にその違いを言葉で表現することが難しいことの evidence を問われる学際的な科学分野である。それは自然科学をも包括し、それを超えることで生まれる総合科学といえよう。その対象や現象が afford している Qualia を捉えることが難しいからこそ楽しい、私たちが魅了してやまない新たな科学領域における探求の醍醐味が、「健康科学」にはある。

試歩：開かれたアゴラをめざして

短期大学部主事も1989年（平成元年）の文部省令により部長と改められた。短期大学部部長は、斎明寺 央部長から、上羽康夫作業療学科教授、高橋清之作業療学科教授、下野登士男一般教育教授をへて笹田昌孝検査技術学科教授に引継がれた。そして、健康人間学が誕生して16歳を迎えた年に、医療技術短期大学部は医学部保健学科になった。健康科学部として成人し独立するための第一歩が踏み出されたと考えている。この間、健康人間学研究会は100回を数え、小誌「健康人間学」も15号発行の任を果たし、「健康人間学のアゴラ」は「健康科学」というさらに広く開かれたアゴラをめざし助走を始めた。

研究とは真理を究めることである。新たなものを発見することであるともいわれるが、その「新たなもの」とは、「まだ見たことがないもの」ということではない。「まだ気がついていない真理」の発見、すなわち私たちの身のまわりの森羅万象が、すでに存在として afford している Qualia に、視点をかえることで気づくことである。ウィルスの突然変異など特殊なものを

を除けば、私たちが日々目にし体験している生活世界の現象においては、新しいものは何も存在しないといってもよい。ただ、私たちが気がついていないだけである。健康科学における研究対象は、近代医学が置き去りにした対象の主観³⁾、生命の直感を視野に入れた、人間の健康そのものである。

健康科学にとって、医学は不可欠な構成要素であるが、健康科学のアゴラにおいては、医学は近代科学の数学的自然科学崇拝へのとらわれから自由になり、人間の健康という真理を追求する「医（いや）しの学」⁹⁾として、その本来の姿を取り戻さなければならない。そこでは、仮説、演繹の推理、実験、検証という近代科学（数学的自然科学）の手法に加え、直感・経験・類推の積みかさね、経験の構造化といった、質的研究⁴⁻⁶⁾、エスノグラフィックスタディ^{7,8)}、現象学的研究といった名でよばれる心理学や社会学で用いられる研究手法も駆使され、広く人間の健康について語られることになる。

文 献

- 1) 濱 弘道：健康人間学への期待。健康人間学，1988：1，2-3
- 2) 斎明寺 央：健康人間学のアゴラ。健康人間学，1988：1，1
- 3) 中村雄二郎：臨床の知とは何か。東京：岩波書店，1992：1-232
- 4) ウヴェ・フリック：質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論。東京：春秋社，2002：1-410
- 5) ロフランド J & ロフランド L：社会状況の分析—質的観察と分析の方法—。恒星社厚生閣，1997：1-372
- 6) Bogdan RC and Biklen SK：Qualitative research for education：An introduction to theory and methods (2nd ed.). Boston：Allyn and Bacon，1992：1-262
- 7) 佐藤郁哉：フィールドワーク：書を持って街へ出よう。東京：新曜社，1992
- 8) Preissle J and LeCompte MD：Ethnography and qualitative design in educational research (2nd ed.). San Diego：Academic Press，1993：1-425
- 9) 石井誠士：学としての健康科学。健康人間学，1988：1，5-22